

昨年末から成人の日に向けて地震についての特集が新聞やテレビで報道されていた。令和6年能登半島地震がこの世の中から忘れ去られてしまわないよう制作してくれている報道機関に感謝する一方、保健厚生課とスクールカウンセラーの先生方が腐心して対策してきたにも関わらず、それらを見てアンバーサリー反応が生徒の皆さんに生じないか、心配であった。

数ある報道の中でも、地震後の人口流出について住民票の異動による推計では奥能登二市で1割程が住居を移したことになっているが、携帯電話の位置情報によると3割以上転出した可能性があるというニュースが気になった。昭和30年代から奥能登では過疎化が始まり、珠洲市発足当時3万8千人以上だった人口は地震直前では1万1千人と3分の1以下になり、それも高齢化率が50%を超えていた。そこに追い打ちをかけたのが、今回の地震である。

そのような地方に位置する本校は昔から生徒の進路希望が多様な学校であった。今でも地元を活性化させようと地元への民間就職や公務員を志望する者から難関大を目指し全国規模で活躍しようとする者までいる。私は平成15年に飯高に赴任し、次のようなことを思った。地元で就職して地元を盛り上げようとする人達はかけがえのない人材である一方、大学を出ないと就けない職業もある。とりわけ、医療従事者と教員は珠洲市と能登町の社会機能を維持するためにも、子どもを持つ世代が安心して暮らせるようにするためにも、必要な人材であると考えられる。もちろん、他地区出身の方もいてもらわないと成り立たないのであるが、数年間奥能登で腕を磨いた後は彼らのほとんどが地元に戻ってしまうので、ざっくりとした肌感覚では過半数が地元出身者である必要がある。そのためにはこの地区で進学に対応できている高校が飯高のみであることから、看護師や教員は毎年5名、理学療法士や検査技師等は数年に1名、医師・歯科医師・薬剤師は10年に1名は、この飯高より輩出しなければならないと勝手に仮説を立てた。この指標はニーズと難易度を一応考慮しているがエビデンスがなく、また、これが生徒の進路希望を歪めてはいけないので、これまで私の心の中に仕舞ってきたし、ピグマリオン効果もなかったと思っている。

私が飯高で働き始めてから20年以上経ち、指標に届いていない職種もあるが、医師は4名輩出し、教員に関しても本校や近隣小中学校には飯高出身の若手教員が多く見られるようになった。教員に関しては平成3年石川国体前に大量採用された年代が退職を迎える前に、ぎりぎり間に合ったかどうかである。奥能登の過疎化・少子高齢化が世界の最先端を進んでいる現状で、前段で立てた仮説がそれで良かったのか否かは、検証し難いことである。社会機能維持のために他にも重要な職業も多方面で存在するだろうが、今後日本のほとんどの地域が通る道であり、奥能登の現状が一つの目安や考えになればと思っている。

さて、飯高生は思いやりがあり、地元愛が強いと常々感じている。だからこそ、地元で就職する生徒もいたり、大学を出たあと地元回帰する生徒もいる。地震を機にそう思う生徒が増えたようにも感じる。そういった人達がゆめかなや日々の学習活動等で培った思考力・創造力を駆使して過疎化を食い止め、奥能登を盛り上げていってくれと期待している。もし、遠方に住まいを移すことになっても奥能登を援護射撃して欲しい。高齢者になりつつある私にとって飯高生はこれから先の未来において非常に頼もしい存在である。